

東京キングダムセミナー③20221210

前半

それでは、東京キングダムセミナーを始めます。今回、ここで3回目ですね。普段は2時からのランインセミナーで聞いていらっしゃる方も大勢いらっしゃると思います。ここでは、本の内容に入る前に、ウォーミングアップじゃあないけれど、序論として、創世記をやっています。創世記を序論と言ったら、(笑)失礼ですけど、読む我々の側の心を備えるために、しているわけです。

さて、1回目、2回目と創世記の最初のところから学んでいますけれど、いつも、以前の内容を振り返りながら進めています。それなので、「ああ、もうそれ聴いたよ」と、思われる方もおられると思いますけれど、そう思わないで、どうぞ、自分の中で反芻する、咀嚼する、そういうふうによく進めていくことです。以前、私もいわゆるビジネスマンセミナーというものによく行きました。このキングダムセミナーもセミナーなんですけれど、そういう、知識的などうのこうのというものではなくて、我々が、神様の前に生きる者として、どういうふうに自分を整えるのかということですから、その一つの根本的な在り方として、1回目2回目と費やしてきたわけです。

それで、「初めに神が天と地を創造された。」というところから、聖書は始まります。以前言いましたように作家さんが机を前にして、「さあ、書くぞ」と言って、「初めに神が・・・」と、書いたわけじゃあないと言いましたよね。承知ですよ。神様から、モーセが啓示を受けた時、モーセは、その時筆記具を持って行ってたんでしょうかね。(笑)おそらく、そんな準備もなく対面して語りかけられたのでしょうか。だから私たちは、神様から、そのように語りかけを受けているのです。今、その場に、いるわけです。

だから、聖書って、こういう本に書かれて、我々の前に持ってこられたわけじゃあないんですよ。じゃあ、どうやって伝えたのかということ、受けた人が、聞く人に言葉で語りかけて、伝えていったわけです。口から口に、口から耳に、耳から心に入って、そして、また人の口に・・・と、伝わっていったわけですよ。「神のことば」を聞いて、それをまた受け入れて、それを語るということに時間を惜しみなく使ったということです。心を惜しみなく使ったんです。ですから、時間ももったいないとか、そういうことが、ないんです。それに比べたら、今の時代は、何ですか。語りかけを聞いたら、もうその5分後に、今日のTVの番組のことを思うじゃないですか。明日のことを考えるじゃないですか。服のことを考えるじゃないですか。もうそれからすれば、・・・ね。いつも書かれたものがそこにあるから、ね。

この前、ヘブライ語のプリントを配りましたよね。持っていますか、・・・右往左往しておられるから、どうぞ、端っこから、プリントをどうぞ。はい、これいいでしょ。ヘブライ語が付いている聖書だよ。なぜこんなのを配ったかということ、別に、「ぜひ、覚えて下さい」と、言ってるんじゃないですよ。あのね、我々は、何時も聖書を持っていて、慣れているでしょ。日本語の聖書を、同じ感覚でいつも読むというのは、それはもう、一つの「習性」です。けど、「もともとこうだったんだな」と、1回引っぱり出して読んで、味わってみると、そうすると、また自分の日本語の聖書を読む時に、新鮮に読める訳です。「ああ、そうだったんだな」ってね。だから、紹介したわけです。それで、これ、下にカタカナが付いてあって、意味が書いてあるんです。そして、横に新共同訳ですけど、縦書きで聖書の訳が書いてあるんです。これ、いいでしょ。で、彼らは、普通に朗読したんじゃないじゃなくて、メロディーをつけて、朗読したって言いましたよね。そのメロディーをつけて、・・・ほら、イエス様は、シナゴグに入って、イザヤ書のところを朗読されましたよね。あの時のことを、ハッキリとは、何も書いてないけれど、おそらく、高い確率で、イエス様は、メロディーをつけて、イザヤ書を朗読された、と思われま。そういうふうに使われています。だから、イエス様も創世記の初めから、朗読出来たんだと思います。だからね、そういう世界。今も神様は、

いちいち文字や本を通すことなく、私達に、語りかけていらっしゃるということです。

聖書の最初の箇所、初めの言葉を、覚えていますか？「ベレシート」ですよね。「ベレシート バラー エロヒーム エット ハシャマイム ヴェエット ハアレツ」という言葉で、ここを、つらつらと、語ったのではないんです。これ、先週やったよね。1章の1節くらい、ちょっとでも、自分で口ずさめるようになったら、凄いでしょ。ね、「あんた、そんなの、どこで知ったの？」って聞かれて、「キングダムセミナーよ。」って、ね。(笑) そんな自慢することではないけどね。いいですか、一言ずついくよ。これね、下にね、母音記号の点とか、こう髭が生えたりしているのが見えるでしょ。それ、母音記号といっしょ、楽譜なんです。楽譜が付いているんです。はい、じゃあ、一語ずついくよ。

(朗誦)「ベレシート バラー エロヒーム エット ハシャマイム ヴェエット ハアレツ」もう一度いくよ。(朗誦)「ベレシート バラー エロヒーム エット ハシャマイム ヴェエット ハアレツ」(朗誦更に2回繰り返す)「ベレシート バラー エロヒーム エット ハシャマイム ヴェエット ハアレツ」 皆さん、凄い。私が習い始めた頃は、2回、3回じゃあ、とても言えませんでしたよ。もう、音が、あっちこっち飛んだりして、・・・皆さん凄いわー。もう、ビックリ。こういう感じで覚えて、そらんじて歌えるようになるといいですよ。でも、「ベレシートって、何だっけ?」「ハアレツって、何だっけ?」って言うたら、駄目よ。ハートの中に、「ベレシート バラー エロヒーム 神が初めに造った」って、もう、瞬時に自分のものになるくらいに、繰り返して言うんです。 夜空を見ながら、「ベレシート バラー エロヒーム エット ハシャマイム ヴェエット ハアレツ」って、・・・もう聖書いらない、ヘブライ語の本いらないの。買い物しながら、バックを下げて、道歩いて、何を考えます? 今晚何にしようかな? とか・・・他に考えることがない時、ほんとに、道を歩きながら、ずっと、「それ」がある。「神様の語りかけ」があるんです。それなんです。私達が「主と向き合う」というのは、そういう感覚を、大切にすることなんです。

昔、荒野で、何にもない所で、神の声を聞いた・・・その時の感覚、分かるでしょ。

今の時代、何でもあるからね。スマホは鳴るは、音楽が聞こえるは、こっちを見ればあのの人に会って、あっちでは他の人から見られるは、・・・そんなのばっかりだから、心が落ち着かない、ごちゃごちゃなんです。そのへんが、全然違うんです。私たちが、どんどん変わっていくわけ、変わっちゃうわけです。ひどい言葉で言うと、この世の中で、神を除外して生きる生き方を、私たちが、習慣の中に、思考の中に、とっぷり入れて日常生活をしちゃってるから、大変なの。だから、我々のところで、日常のチャンネルを巻き直さないといけない、その辺を見直した方がいいです。

聖書の神様は、今の時代でも、そのようなスタイルを、じっと、保持していらっしゃるんです。これ、初めは物凄くやりにくいけど、皆さん長くクリスチャン生活をしているでしょ。その間でもやってこられたはずですよ。やれば、やるほど、分かって来るんです。慣れて来るんです。そうですよね。だから、聖霊のバプテスマを受けて、聖霊に何か声をかけられて、・・・と、いろいろあるだろうけれど、そういう自分の底辺の中にこの感覚を養っていないと、聖霊以外の霊が来たって、分かんないわけです。バーッと来るからね、それを錯覚しちゃうわけ。だから、悪霊の働きが、見分けられないわけ。それほど我々は、今、神を除外して生きる現代社会の雰囲気の中に慣れ親しんでいるから、だから、聖書を読んで、「うーん」って、考えるでしょ。これは、どういう意味なんだろう

東京キングダムセミナー③20221210

うかと、辞書を引っ張ってきて、神学者の言葉を聞いて、くちやくちやくと考えるんです。現代神学っていうのは、・・・私ら神学校にいた者は、そればっかりよ。神学、神学、哲学、神学、心理学、神学・・・って、くちやくちやく、そういうふうに頭で考えださないといけないんです。ですから、神学者は、それを掘り下げてきました。

それでね、この聖書の言葉には、「読み方」があるんですよ。

何回も、このラインセミナーで、言ってきましたけれど、どうぞ、覚えておいてください。神様の行為としての「動詞」に気をつけて読むとよいんです。そうすると、「神様の行為」がよくわかるんです。聖書が強調しているところが、良く分かるんです。そのように、読むわけです。

だから、前にも言いましたように、創世記の初めから読む時に、神様の行為としての動詞に○をつけて読むとよいです。そうすると、神様の行為がよくわかるんです。聖書が強調しているところが、良く分かるんです。そのように、読むわけです。どうか、そのことを覚えておいてください。

それから、文章の中で、「初めに」出てくる、言っている言葉が、強調点なんです。ギリシャ語もそうなんです。「初めに」書き出していること、言っていることが強調点なんです。

例えば、創世記の最初の箇所、「ベレシート 初めに」「バラエー エロヒーム 神が、創造した。」・・・このところ、「エロヒーム バラエー」じゃないんです。「神が造ったぞ」という言葉が、大概是、ポイントくるんです。が、そうではなくて、「初めに」が、一番初めにきて強調されていて、そして、日本語だったら、「神が造られた」でしょ。その順番でしょ。ところが、聖書は、「造ったんだよ」誰が？「神様が」と、つまり、「造ったんだよ、神が」となっていて、動詞に注目させるように強調しているのです。

それから、昔の言葉、もう、3000年以上前に語られたことばなのに・・・あの時代に書かれたことばは、凄いことに今でも翻訳されているんですよ。今、我々は、紫式部の書いた文章を、今の私たち、読めますか？こんな難しいのを・・・って思うじゃあないですか。それから、今だったら、例えば、「小春日和の暖かい日に、イチョウが黄色く、街を飾っております。通りを抜けると、池があって、橋があって、クリスチャンセンターがありました。」・・・こういうふうに語りますよね。上手に、形容詞つけて語るじゃないですか。

でも、聖書って、そうじゃあない。そんなこと言いませんよ。「そこに、クリスチャンセンターがあった。」と、それだけ。聖書って、もう、そっけないんです。それでも、聖書の中では、言いたいことは、きっちり、言っているんす。

何故かという、繰り返し出てくる単語があるでしょ、日本語に、訳されているものを見ても分かるはずですよ。「繰り返し出てくる言葉」は、要、注意です。「繰り返し出て来るフレーズ」にも要注意です。そこに、強調点があるんです。

そういうふうに聖書を読むと、聖書の中にいっぱい繰り返しの言葉が、出て来るでしょ。・・・なんですか？もう、分かりですよ。1章の中で、繰り返しの言葉が、何回も出てきましたからね。いっぱい出てきたその繰り返しの言葉の中に、いろいろあるけど、「名づけた」という言葉が、ありますよね。「良し、とされた」、「祝福された」「分けた」と、いうことばがありますよね。「種類ごとに」、「種類に従って」って、いうことばもありますよね。

さて、聖書の「読み方」については、この辺で終わりにしておきましょう。

はい、それでは、クライマックス。27節に、神は人を「ご自身の形」として創造された。神の形として、人を創造し、男と女とに彼らを創造した。」28節「神は、彼らを祝福した。神は、彼らに仰せられた。『生めよ、ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』と言われた。人間だけ、その使命を言っているわけです。神の形として、人を創造して、男と女とに彼らを創造したんだと、言っているわけです。

2章になると、あとで、女が造られる詳細が書いてあるけれど、神様は、第1番目に何を言ったかという、「一人の人を創造された」と、言われたのです。そしてそれは、「男と女だった」と。つまり、一人の人を造ったのです。これが「ハアダム・人」なのです。「ハアダム・人」を造った。それを「男と女」とに造った。2章に書かれていることだけをとったら、何か、女は、男の後に造った「つけ足し」みたいに、そう読めちゃうじゃないですか。でもここは、順番に丁寧に読んでいくべきです。1章では、「人」これが、「アダム」と言うんです。(ホワイトボードにヘブライ語を書かれて説明中) 本当は、この一人の人のことを「アダム」と言うんです。それを、男と女とに造られましたよと、言っているんです。それから、2章が始まります。

それで、いいですか、2章です。2章になるとね、エデンの園の描写になるんですよ。その初めになんて書いてあるかという、「(5節)「地には、まだ1本の灌木もなく、まだ、1本の野の草も芽を出していな かった。」・・・それは、「まだ、地上に雨を降らせていなかったからだ。」「また、大地を耕す人もいなかったからだ」と、言われている。つまり、大地を耕し、守る、支配する、治めるということが、人に与えられた使命だったということが、言いたいんです。だから、「人があってこそその大地だよ。」と、言うことも言える。

そして、(2:7節)「・・・地のちりで、人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生き物となった。」・・・8節「神である主は、東の方エデンに園を設け、そこにご自分(主)が形造った人を置かれた。」「東の方のエデン」って、何よ。「エデンの東」って、知ってますよね。ここにお集まりの人は、「エデンの東」って言えば、・・・分かるでしょう。(笑)若い人たちの中では、ポカんと、していらっしやるかも知れませんが・・・。なんで、「東の方」というのが、出て来るの?と、言うのを、ちょっと覚えておいて下さい。あのね、神様には、こっから、こう持っていつて、こう築き上げるという、目的がある。

2章の七日目の描写の時に説明しましたよね。「付け足しの言葉」があると。

7日目を祝福して、聖なる日とされた。なされたすべての業を辞められたからであると書いてあるけど、そこに、奥義が隠されている「付け足しの言葉」があるって言いましたよね。「らアソート」「造るために」と書いてある。「造るためだ」と。だから、神様の創造は、7日間で終わったように見えるけれども、そこから、神様は、造り上げたいものがある。そう、読める。

昔から、我々の深い伝統的な定着した神学の中では、「7日間で完全に完成した、終わった、出来上がった。でもそこで、アダムが罪を犯したから、失っちゃった、終わっちゃった、だから、それを回復することで、救いの完了なんだ」ということになるでしょう。

でも、それで、もう、終わりですか?じゃあ、もう後は、天国よ。もう完了。はい、もう救われました。ですか?・・・いやいや、天地創造は、まだまだ、「終わっていません。」と、言うことで

すよ。

ここに書いてある「その最後の一言」、「らアソート」のおかげで、エデンの園に我々が帰ったとしても、こっから、救われてエデンの園を回復し、まだ我々一人一人は、「神と共にやるべきことがありますよ。」というメッセージが、ここに込められているんです。

「東」というのは、聖書の中で、突拍子もなく出て来るんです。東って言うのは、何なのでしょう。東というの、聖書の概念では、全望なんです。東が前。だから、モーセの神殿の入り口は、どっち側？東なんです。だからね、神様が、これからしようと思おう前方に、エデンの園を置き、人を置かれたんです。

神様は、その、まあ、言っちゃなんですけれど、一緒に歩くけれど、人を先にやって、神様は、「後から行くぞ。」そういう感じですよ。アブラハムに、私の前を歩き回れと言われてたんです。じゃあ、神様がおられて、アブラハムが、小さい子がこうまごとして遊んでいる、「ちょこちょこ親の前で、歩いていたら、それでいいんだ」と、そんなふうには受けとっては、勿体なさすぎる。

「アブラハムよ、私の前を歩け。私のパイロットとして、私の船頭役として、「あなたがあなたの道を歩け。」「レフレハー」と言って、「あなたの道を行け」と言っているようなこの言い方。だから、あなたが歩くことによって、神様が、そこを進むことができるんだと。こういう関係ですよ。神が選んだ人というものに対するもの凄い油注ぎ、任命、期待、パートナーシップ。だから、あなたが行く所に道が出来る。あなたが行く所から悪霊たちは、逃げていく。あなたが行く所に神の国が、築き上げられる。そういうことなんです。

それから、「園の中央にいのちの木と、善悪の知識を知る木を生えさせた」と、・・・これについては以前、言いましたよね。そして、その後四つの川が出て来る。「この川が・・・」って、「突然、何？この川って、何でこんなところに書かれるのよ」と、言いたくなるけど、「一つ一つの「川」、これこそがその当時の全世界の描写です。その中に、エデンから、川が流れ出て、世界各地にあふれ出て、潤していくのだ」と、言っているわけです。その中心に、神が造られた人がいる訳です。15節「神である主は、人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、そこを守らせられた」と、言っているのです。

「守る」というのは、何から守るのですか？守るべき必要があるから、守るんですよ。そして、「治めよ」と言われたのです。「地の上の這うものをすべての生き物を、支配せよ」と言っているんです。その「は・う・もの」が、3章でやって来たじゃないですか。ほら、「はうもの・・・」、ここにピーンと、こないと、(笑)「来たな、来たな」って言うくらい。

あの・・・蛇ね、もともと造られた時に、足があった・・・らしいですね。聞いたことある？生物学の研究では、蛇の骨格をずーっと調べていったら、手や足の名残りがちょっとあるらしいんです。もう、ビックリです。私は、初めから這っていて、これからも、はうんだと、そう思っていました。そしたら、あるクリスチャンたちが、「足があったんだって」と言いだして・・・、「ほんとですか？それ」って聞いたんですけど、ね。まあ、それはどっちでもいいけれど、「地の上の這うものをすべての生き物を、支配せよ」と言っているわけです。

3章で、「善悪の知識の木からは食べてはならない。それを食べると、あなたは、必ず、死ぬ」と、言う話が出て来るわけですが、エデンの状況描写が整った後で、神である主は、「人が一人であるのは良くない。私は人のために良い助け手を造ろう」と言われたんですよ。いよいよ、分けるとこ

ろなのけど、・・・「人が一人でいるのは良くない」って、「なんで？ 生めよ、増えよとっているから？ 一人だけだったら、どうやって生まれるの？」と、いうふうに、ずっと解釈されてきています。そうですよね、間違いじゃないですよ。「男と女がいないと、・・・。」って、そのようにいろいろと解釈されてきました。

私は、もう何度かいろいろな時に、ここに触れて言っていますけれど、「我々に似るように人を造ろう」と、神様が「我々」と言われたその「我々」って誰ですか？「我々に似るように」「我々のように、人を造ろう」と言われた、その「我々」は誰なのか、聖書を初めて読む人が、いろいろと、迷うところです。「我々」って、「神様と天使？」という解釈もあるほどです。人を天使よりも先に造っていて、「劣る者として造られた」とかなんとか言ってね。(笑)

この前、神様のことを、「エロヒーム」って、言いましたけれど、この「エロヒーム」って言うのは、複数です。「エロヒーム」自体が、複数です。「なんで？」「神は、一人じゃあないの？」って、疑問に思うかもしれないけれど、以前、言ったように、「エロヒーム」って言うのは、複数です。ということは、神は、一人のお方なだけけれど、神は、交わりの神であり、共同体の神なんです。それが神様の在り方、属性です。これは、人間の3次元の頭では、完全には理解できない。非常に分かりにくいことなんです。それから、「三位一体」ともいうでしょ。父と子と御霊のその奥義もそうです。

それで、神が何で「我々」というか、解釈してきた結果、「父と子と御霊、「三位一体」という解釈が、一番、定着してきたわけです。伝統的にも間違いありません。で、それは、交わりの神、共同体の神でもあるということです。驚くことに、ヨハネの17章21節に、イエス様が、弟子たちのために祈っているそのことばの中に、「父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。」と言っている箇所、それは、「父と子と御霊が一つであるように、このあなたがたが、三位一体の一つであるように、あなたがたも一つとなりますように。」と、イエス様が、そう祈っているんです。凄い祈りですね。

それで、この次、神様はどうしたかっていうと、アダムに「あなたに、ふさわしい助け手を造ろう」と言われました。ここで、「ふさわしい助け手」という言葉が使われました。それが、「エゼルケネクドウ」と、いうことばです。「ふさわしい助け手」と、訳されていますけれど、・・・(ヘブライ語の2章のコピーを配られる)ははじめから、これを出しとけば良かったんだけど、27ページ、18節を見て下さい。(朗誦)「ヴァヨメル アドナイ エロヒーム ろー トヴ ヘヨット ハアダム レヴァドー エエセハ ろー エゼル ケネクドー」とありますよね。この下の欄外の18節の注釈に、「彼と向き合う助け手」それから、直訳「真向いの、反対の」って、こう書いてある。これを、「ふさわしい助け手」と、訳したのは、どういうことなんでしょうか。もの凄い意識ですよ。神様が、「一人でいるのは良くない」というのは、「我々に似るように造るんだから、アダムは一人でいるのは、良くない。」と言っているんです。つまり、交わりの神が、自分達と同じ似た者として、人を造るんだから、アダムが一人だったら、良くないんです。そうでしょ。だから、我々は、「アダムが造られて、そして、エバが造られた」ということになっている。「アダムの、脇腹を取ってそこから造った」って言っているんですよ。そうですよね。それを、「彼と向き合うものとしての助け」だと言っているんです。

「じゃあ、何ですか、女は、男の助け手として造られていて、男は、女の助け手じゃあ、ないのか」と、どう思われますか？むかついていました？（笑）この点で、多くの人が、今まで、決めつけているんです。「女はこうだ」「男はこうだ」「俺は、うちの嫁の助け手なんかじゃあない。」と、「うちの嫁が、おれを助けるもんだ」と、「聖書は、そう言っている」と。皆さんの目が吊り上がってきていませんか？（笑）共同体の神のなされることの中で、これが行われているということを知らなければいけません。単なる、男がこうだ、女はこうだというふうにとったら、物凄く、貧しい。・・・そうなんです。

ですから、いいですか。同じ一つのことを二つに分けるという意味で、描写されているものから、この二人は、互いに向き合う「パートナー」です。「私とあなた」との、この関係です。すべて、「私とあなた」ですよ。神様は、アダムという一人の「人」を造って、「私とあなた」で、造ったんです。それで、あなたは、二つに分けられて、あなたたちは、「私とあなた」との関係です。

これを、「マルチン・ブーパー」というユダヤ人の聖書学者であり、哲学者が、この「私とあなた」という関係性を、これが聖書の「根源語」だと言いました。良かったら、名前をメモしておいてください。皆さん、今日我々、皆さんと出会いましたよね。じゃあ、「私とあなた」という出会いが、これが、「根源語」だと言いました。ここからですよ。神が造った国、「神の国」、「キングダム」は、「関係性」だと言う根本的な解釈が出て来るんです。「神の国は、死んだ後の天国にある。」「神の国は、キリストが再臨してから、来るんだ。」「・・・神の国は、あそこにある、ここにあるという、そういうものではなく、「神の国は、あなたがたの間にあるんだ。」と、イエスキリストは、言われた。つまり、「神の国というのは、あなたがたのレーションシップの中にあるのだ」と言われた。そうですよね。我々って、生まれてから、死ぬまで、絶えず誰かの関係性の中で生きていますよ。我々は、いつも誰かと関係を持っている、でしょ。そうですけれど、その「関係性」が問われているんです。我々の関係性は、「何による関係性なのか」、神が「我々」と言われた「関係性」を我々は、持っているだろうかと言うことが、問われているのです。

イエス様が、「わたしと父との関係性」のように、「彼らが一つになるように」と、言われたその「関係性」を我々は、持っているだろうか。「いやー、そこまでは、・・・」でも、「福音というのは、我々の人々と、兄弟姉妹と、そういう関係性を、あなたも持てるんだよ。」「あなたもその関係性をプレゼントされたんだよ。」と、言われているわけです。

では、その関係性の「一番、最初の関係性」は何かというと、「あなたと主」との関係だということです。キングダムセミナーの中で、「私は、主の中にいる。」「主が私の中にいる」という。これを「相互内在」と言ってきました。具体的にそれを実感できるのが、聖霊の内住です。主とのその関係の中に、私たちが、まず住む時に、我々の内から、今度他の人に向き合う、この時に、関係性が築かれるんだ。それが、「神の国」と、いうものなんだ。「我々に与えられている、神の權威を、力を相手に、あなたに使いますよ。あなたも私に使ってみなさいよ。」という王権です。まだ、「ピンと来ない」となると、キングダムセミナーの本の中の「王権を使う」というところを、参考に読んでみて下さい。

ですから、「エゼル ケネクドウ」というのは、女のことだけじゃあなくて、共同体の誰もが、「エ

ゼル ケネドウ」なんです。相手に「真正面から向かっている関係性」を持っている。時には、相手に対して、反対をすることもありますよ。でも、「反対をする事に依る助け手」というのもあるんです。日本人は、これが、苦手です。面と向かって反対するって、苦手でしょ。摩擦を起こしたくないもんね。でもこれが得意な民族が、在ります。それは、ユダヤ人です。これ、ユダヤ人が聞いてたら、ごめんね。でも、本当ですよ。もう、真っ向から反対する。なぜならば、もう初めっから、どっか、・・・真っ向から反対する相手が「エゼル ケネドウ」だと、・・・これを腹の底から信じているから、「少々喧嘩しても、こっから出ることあるかい」って、そういう、激しさがありません。

私も二人息子がいて、もう所帯を持っているんですけど、息子が、「お父さん、結婚する」って言った時に、「お前さ、彼女のことを、自分の骨からの骨、肉からの肉って、思えるか？」って聞いたから、・・・そしたら、「結婚するから、今度会ってくれ」と言って、そこまで言ってくる本人が、「そんなこと思えん」とは、言えないじゃないですか。(笑) そう聞いたら、「そう、思っているよ。」と、言うんです。「ああ、そうか」そう返ってきたら、それ以上、親が問うことないじゃないですか。何を問うんですか。どんな人か、知らんけど。本人がさ、「これこそ、我が骨からの骨、肉からの肉」と、思って、向き合って、結婚しようとしているんだから。「どうぞ、どうぞ。」って、言うことでしょ。本当にね。みんなそうですよ。

我々は、だからこの「エゼル ケネドウ」の関係性というものは、「根源語」だということ。これは、「マルチン・ブーバー」が、これが、聖書のエッセンスだということ、彼は、一生涯かけて、たどりついたんです。私が、キングダムセミナーのことをずっと、心に温めてきたのは、ブーバーさんのこれを若い時に、思っていたからです。「なるほど、なー」って。だけど、かれはユダヤ人だから、キリスト教の神学者が、ユダヤ教のラビさん達も、ブーバーの言うことをあんまり、拾いませんでした。そこまで、言っていなかったのかもしれない。

この点で言うと、私たち日本人は、付き合い上手ですよ。笑顔で、優しく、付き合い上手ですよ。だけど、神の共同体として、王権を持ち合うものとして、私たちの付き合いは、もっと、変わっていける、もっと、濃厚になっていける。もっと、この中に神を現わしていくことができるはずです。先週言いましたよね。「イーシュ」と「イッシャー」と書いて、「男」と「女」。「イーシュ」というヘブライ語の中にある言葉と「イッシャー」というヘブライ語のことばの中にある違う文字が1個ずつあって、その文字を合わせたら、「ヤー」という「神」を現わす言葉になるんだってことを話しました。

私たちが、共に生きる時、そこに「神」が、現われる。私は、このセミナーをやっているおかげで、いろいろな人と電話で話をすることがあります。1時間、2時間、話し込むことがあります。質問を受けて、「こうですよ、ああですよ」と、しゃべっていると、つくづく思うんですけど、私自身が主から語りかけを受けるんです。その人と話していて、その人が言ってる言葉じゃありませんよ。でも、その人と話している中に、主がおられて、私とその人と話している中で、メッセージを受け取っていくんです。そんなことが、よくあります。我々が、3人、4人集まるところに主が、おられるというのは、本当にそうです。それをまともに受け取ってないから、聞こうとしないから、その中におられる主の臨在と声を見逃してしまうのかも知れない。

この間も、車の中で語り合ったんですけど、ずっと、自分に与えられた、そばに置かれた妻の生活やすべてのことを見ている中で、主が私にメッセージを下さる。妻が私になんか語るんじゃない

東京キングダムセミナー③20221210

いですよ。・・・普段ね、それをいっぱい語っているけどね。(笑) いっぱい注意されていますよ。
 (笑) ホントに、ね。でもそれとは違って、・・・そりゃ言ってくれている中でもメッセージはあるけど、ホントに、そばに居るいわゆる妻の臨在を、その臨在に触れているだけで、主が自分の中に目を開かせてくださる。そういうことがあるんです。このキングダムセミナーの中でも、いくつもあります。でも、彼女は、言った覚えがない。知らないですよ。知らないけれど、でも彼女だけでなく、私は、兄弟姉妹達や出会う人や、語らう人の中で、こう、お茶飲みながら話している、そんなかで、聖霊が語られる。「なるほど・・・」と、そういうふうにかかれていくんです。私たちは本当にこの世の普通の付き合いみたいな感じで、生きているけど、誰しもが、…クリスチャンもみんな、生きているけど、それじゃあ勿体ないです。主が開いておられる「私とあなた」、「我と汝」という「根源語」は、揺るがない状態でそこにあるから、それを大切にしないといけない。そこに聖霊の示しや、賜物も働いて来るんです。相手がある事だから、みんな自分一人で、私はこんな感覚で、「今日、こんな気持ちよ」、「今日はこんな感じで考えているよ。」私はどうのこうのと、もう、「自分が、自分が」、「我が、我が」の世界です。けど、根源的な神のことばは、「私とあなた」なんです。それを「私とあなた」というのが、いつしか、「私とそれ」になっちゃうんです。「私とスマフォ」、「私とイス」になっちゃうんです。こういう感じに、人と人であっても、「私とあの人」というふうにあたかも、「私とあなた」が、「私とそれ」になって行く時に、神の国は、崩れていく。もつと言うなら、そこにサタンや悪霊への隙がある。「私とあなた」との間に「私とあの人」が「私とあれ」ってなった時に、そこにスキを生むことになるんです。

3章で、蛇が出てきて、エバに近づいていったのがそれです。さあ、どうでしょうか。

皆さんからの応答があれば聞きたいですけども。10分間ほど休憩いたしましょう。

後半

今日話したところか、これ迄のところ、何か質問なり、意見・コメント、何かありますか？

参加者：「向き合う」と「それ」の説明がすごく分かりやすかったです。「私とそれ」になってしまうと、違うところに入ってしまうということが、良く分かりました。隙を与えてはいけないということですね。

先生：シビアな問題です。本当に。「私とあなた」のつもりでいるけれど、いつの間にか、「私とそれ」になっている。それに、非常に敏感になることが出来れば、守られます。そこに、聖霊の油注ぎがあるんです。

参加者：先生、日本の教会、神学校の9割がたは、女性の方が、「助け手」で男性の方が、ちょこっと上で、女性の方が支えていなければならないような状況です。四国のある教会では、女性は牧師になってはいけないというところもあります。ルーテル派とか、・・・他の派でもそういうところもあって、女性は、牧師になってはいけない、認められない、ということで、いつも女性は、しゃべらず、男性の一段下のランクにいるということが、固定観念のようになっていたので、今日の話聞いて、目から鱗でした。

先生：あのね、皆さんが言われている「助ける」は、一般的な「助ける」、現代的感覚解釈なんです。

聖書で言っているのは、「主は、我らの助け手」、「助け主」で、「助ける」ということであって、何も1段下の補佐役ということではないんです。

参加者：教会の頭は、キリスト。女の頭は男。その理解でいいんでしょうか。

東京キングダムセミナー③20221210

先生：これでいけば、我々は、全部、主からの対等の価値ある存在。でも、一つ、神と我々以外の存在があるでしょ。そう、サタンです。悪霊達です。それらの兼ね合いの中で、我々共同体は、守られなければならない、いわゆる、「守りの砦」というものが必要です。ですから、神様は、その砦の中に、守るための、防御のための「つて」である「秩序」を置いておられる。その秩序の中で、「あなたはここ、あなたはそこ」ということが、これが土台にないと、ひとつの価値の優劣になってしまう。私達が、「覆い」ということを考える、それもキングダムセミナーの中にあるけれども、「覆い」というものは、事の優劣や価値の優劣にすぐ、すり替わってしまうんです。違いますよね。だから、「男が頭」だからと、言うのも、・・・それを言うと、「やっぱりね」と、思われがちですが、悪霊とサタンとのかかわりの中の「立ち位置」、そして、その動き方、その造られ方に違いがあるように、それぞれの「立ち位置」を、パウロは、知っているんだと、思います。だから、「秩序と覆い」というのは、神がそのように造られたというのは、非常に深い奥義があるんです。だから、一見、女の方が、下の位置のように置かれたりするけど、それは、違います。それと、「女は教会で黙っておれ」とか、言うのとは、また別ですよ。コリント教会の異常な姿がそこにあったから、パウロは、そういわざるを得なかったという要素が、非常に強いわけですから。

だからと言って、男がそんなに偉いのか、強いのかというと、そうじゃあないですよ。男の弱さって、いっぱいあるじゃないですか。女の「エゼル ケネクドウ」が無かったら、もうとんでもないことになっていますよ。なりますよ。で、女は女で、男の「エゼル ケネクドウ」が無かったら、それも立ち行かない。その「私とあなた」と向き合う、「根源語」を我々が悟ることが、非常に成熟につながります。

参加者：先生、「覆い」と「秩序」って、どう違うんですか。

先生：ああ、一緒です。その「秩序」という言い方も、もっといい日本語がないかなと、思うんですけど、「秩序」と言わざるを得ない。他に良い言葉があったら、…何か、考えて下さい。(笑)

「秩序」というと、何か、堅苦しい、全体主義的な、封建主義的な・・・そんなふうに思うじゃないですか。

参加者：戦いに出て行く頭数にね、男を数えるんです。ああいうところとの兼ね合いが、秩序な中で・・・

先生：うーん、それもあるけど、もう、戦に出て来る現実として、男数を数えるというのは、・・・

参加者：人口調査の時とかもね、・・・女性は数に入っていない。

参加者：コリントの教会で、何が起こっていたのか、どれだけ無秩序な状態がおこっていて、パウロがそれを言わざるを得なかった、それが、あったんですよ。そう言わざるを得ない。

先生：うん、新約聖書というのは、旧約とまた違って、現実の新訳の教会の落とし穴や問題点というのは、如実に、リアルにそれが、取り扱われていた、あの時、あの時代のコリントやローマやエペソやその教会のその状況を生々しく語っています。で、我々は、それを普遍化しようとするんだけれども、そこは、無理があります。ただ、どこからたどらなければならないかということ、もう初めから、このことをきっちり押さえた上で、新約でパウロが言っている、そういうことばを分析しなければならないと思います。これが、揺らいできているのに、新約のあの言葉だけを取って、「ほら、こう言っているじゃあないか」と、鬼の首を取ったように、その通り言うというのは、私は、所謂「教条主義」だと思います。分かります？「教条主義」というのは、聖書のこの一句を取って、「これが絶対だ！」「ここにこう書いてあるじゃないか」と言って、突っ走ろうとする。それには、無理があるでしょう。

参加者：「エゼル ケネクドウ」の「エゼル」と、同じ単語が使われているところが、詩編 121 編の 2 編

に書いてあると、以前、先生から聞いたことを思い出したんですけど、(1編b)「私の助けは、どこからきますか？」詩編 121 編の 2 編「私の助けは、天と地を造られた主から来る」と書いてあって、この「私の助け」は、天と地を造られた「主から来る」のであって、女からと書いてない。このところの「助け」が「エゼル」を使っている。だから、女性が下ということは、ない。「エゼル ケネドゥ」は、神の助けであって、女の助けでは、ないと、ここに書いてありますよね。「神の助け」って。これ、先生から聞いたことなんですけど、先生、こういうことなんですよね。ここに、助けの答えがあります。詩編にいっぱい書いてある、「助け」は、この「エゼル」を使っているんですよ。

先生：あの・・・エバが造られるところをちょっと、振り返りましょう。2章の18節に「神である主は言われた。人が一人であるのは良くない。私は人のためにふさわしい「エゼル ケネドゥを造ろう。」で、神は、すぐにエバを造ったんじゃないんですよ。なんと、「神である主は、土からあらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造り、・・・人のところに連れて来られた」「人がそれを何と呼ぶかをご覧になるためであった」と書いてある。なんと名前を付けるかを見るためだと、目的が書いてある。人がそれを呼ぶと、なんであれ、それが、その生きるものの名となった。これが、人が「王権」を使う、ひとつですよ。

わたしたちが、私たちの周りにいる者を何と呼ぶか。あなたがそのことを何と名づけるか。それはあなたに主権があり、あなたにリーダーシップがあり、イニシアチブがあるんだよと、周りに起こる出来事をなんと、あなたは呼ぶのかと、それに自分がどんな名前を付けるか、ということは、神様は、つけてないんです。あなたがつけるんです。あなたに任せている。そこ人間に対する信頼がある。あなたが名前を付けて、前に行け、前に歩め、という、あなたが祝福するものを私は、祝福し、あなたが呪うものを私は呪う。あなたを呪うものを私は呪う。そう言って、動物たちを造って、連れて来たんですよ。

で、このところはね、エバを造るための前置きというか、前段階のなんか遊びみたいに思われているかもしれないけれど、そうじゃあないですよ。アダムの王権というものは、物凄いものがある。「だってそれ、男でしょ。」じゃあないんですよ。この中に女の部分もあったわけですよ。後で、二つに分けられるわけですから。

だからね、人がそれを何というか、・・・これも朗読で言うと、物凄く、力が込められているんですよ。最後にアダムが、(2章20節あたり)「すべての獣に名を付けたが、しかし、アダムには、ふさわしい助け手が見つからなかった。」と言うんです。(朗読)「ヴァイクラーー ハアダム シェモット れほる ハベヘマー ウレオフ ハシャマイム ウレほる はヤット ハサデー ウレアダム ろー マツァー エゼル ケネドゥー」「ウレアダム だけどアダムは、ろー マツァー見つけなかった エゼル ケネドゥーを」・・・この中に一つの盛り上がりがあるんです。

だから、神は「深い眠りをアダムの上におとした」と、「彼は眠った」と、書いてある。

そして、他の土で、エバを造ったんじゃないかと、アダム(人)自身を分けて、組み立てて、・・・この言葉が凄い。「組み立てて」という言葉、これは、今までの単なる「造ろう」ではないんですよ。一生懸命に工夫して、実質的に造ったという力が込められているんです。強調があるんです。そして、「彼女をアダムの前に連れて来た。」そうすると、アダムが、ここですよ。23節「ヴァヨメル ハアダム ゴット ハバアム エツェム メアツツマイ ウヴァサル ミベサリー れ ゴット イカレー イシャー キー メーシュー るコはー ゴット」

皆さん、29 ページのヘブライ語の 23 節のところを読んでいて、「ヴァヨメル ハアダム」その下の 3 行にわたる 23 節のところの中に、同じ単語が、3 つ、出てきますよね。分かります？この 2 章 23 節 P29 の上から 2 段目から始まる「ヴァヨメル ハアダム すると言った人は、」アダムが言ったんですよ。エヴァを見て。「ゾット ハバアム エツェム メアツツマイ ウヴァサル ミベサリー れゾット イカレー イシャー キー メイーシュ るコはー ゾット」3 つ、同じ単語が出てきますよね。一番右端に立てに 3 つ。見つけた？「ゾット」「これは」ということばです。一つ、真ん中の中には「れ」という、前置詞が付いていますけれど、・・・、「これは、これこそは、」私の骨からの骨、肉からの肉、これは、女と呼ばれる。なぜならば、これは男から取られたからだ。」「これこそは、これこそは、」「これは、これは、」と言って、もう、凄い興奮、そういつているんです。それゆえに、「男は、彼の父と母と離れて、彼の妻とくっついて、「一つになるんだ」と、「彼らは、一つの肉となるんだ」と、言っているわけです。アダムとエバに、お父さんとお母さんがいたんですか。誰よ。いないよね。

参加者：「天のお父さん」

先生：ああ、天のお父さん。ハレルヤ。そうですね、そう言えば。お母さんは？だから、皆さん、この 24 節を見てね、この天地創造のアダムとエバの物語が、一つのシンボルである、今、これを読んでる読み手のあなたとこれを聞いているあなたに対する、現実のメッセージだということを、含んでいます。単なる、遠い昔話ではありませんよ。これを読んでもあなたに、主は、語りかけています。

「父と母と離れるということは、なんですか？一緒にいた方がいいじゃない。便利だし、孫の世話をしてくれるし、・・・でもね、本当は、この「離れる」って、ひどい言葉なんですよ。「ヤアゾヴ」っていう言葉は、「捨てる、ほっとく」という意味もあるんだけど、そう訳してしまうと、日本のクリスチャンは、つまづくでしょ。でも、神様は、ハッキリしているんです。「親は親で生きていけ」と。しかし、「子供の夫と妻は一つの肉となって、そら、行け」と言っている。でも後に「あなたの父と母を敬え」とも書いてあるよね。

その連続する社会の中では、本当に敬いますよ。けど、霊的現実の中で、新しい次の世代は、新しい使命の中に、前に進んで行かなければならない。その辺のメリハリは、物凄く、聖書の中で語っています。

だから、これはね、若い二人というよりも、これを読んで、もうすでに子や孫達がいる人間たち、我々が、今、これを深く受け取らないといけない。だから、初めに、親子ありきではないんです。今や、初めに神によって造られたこの「エゼル ケネクドウ (向き合うものとして)」ありきなんです。では、親と子は、「エゼル ケネクドウ」じゃあ、ないんですか言う人もいるかもしれないけれど、そこを突っ込むと、堂々巡りになります。親と子も、エゼル ケネクドウ ですよ。もちろんですよ。でも、親は、子供たちを新しい神の前進の中に、東の方に、押し上げて、押し進めてやらないといけない。解き放ってやらないといけない。

「いつまでもここに居たらいけないのね。」「現実に距離を取らないといけないんだ」と捉える人もいるかも知れないけど、そう言う事じゃあなくて、一緒にいても、それは、成り立ちますから。でしょ。同居していても、「お前たちはお前たちの東へ行け」といって、親は、先輩の世代は、解き放ってやらなければならない。それが、上の世代の王権ですよ。

その時、(25 節)「人とその妻は二人とも、裸であったが、恥ずかしいとは、思わなかった。」と、ありますが、さあ、皆さん、この言葉をどう受け止めますか？アダムとエバが創造された時、

神様は、1章の最後に、「はなはだ良かった」と、言われたんですよね。と、言うことは、「良かった」って言っているんだから、「完璧な人」なんだ。「完璧なエゼル ケネクドウ」なんだ。神とも「私とあなた」の根源語の世界なんです。完成しているんだ。完璧なんだ。と読めば、あと、3章の出来事は、どうなんですか？「裸である」ということは、裸である事が、恥ずかしくなったんでしょ。「欠け」、「欠点」だったんでしょ。「足りないところ」だったんでしょ。・・・後で言っていますけれど、「善悪を知る木の実を食べたら、それが見えた」ということですが、この時は、「裸である」ということ、「ありのままである」ということが、別に、恥でも欠けでも、隠さなければならぬことでもなかったわけです。勿論、「一体だった」、「一つとなる」ものであったわけですが、・・・でも、後に分けられていたんですよね。「一体となる」という、霊的な実在はそうなんだけれど、物理的には、分けられていたんでしょ。

参加者：「一体」ということは、信頼関係があったんじゃないですか。我々と同じように。

先生：うん、だから、恥ずかしいとは、思わなかった。

さあ、残りの時間、ちょっと、3章に触れておきましょう。

3章1節「さて・・・蛇は」というこの言葉、凄くないですか。文脈的な書かれ方として、語り手として、物凄く強調があります。元々、3章とか、1節2節とか、数字はついてなかったからね。野の獣のうちで、他のどれよりも賢かった蛇は、女に言った。「園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」2節女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べて良いのです。3節しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と、神は仰せになりました。」さあ、段々と、狡猾だった蛇のこの言葉、行為が明らかになっていきます。蛇は、女に言って、なぜ男に言わなかったのか。「どうして？」なんで蛇は女に言ったのか、疑問が湧いてきますよね。それに対して、「園のどの木からも食べてはならない」と、神は本当に言われたんですか？」神は、そういいましたか。「園のどんな木からも食べてはならない」と、言いましたか。言ってませんよね。「どの木からでも食べて良い」と、言われたんです。だから女は蛇に言った。2節「私たちは、園にある木の実を食べても良いのです。3節しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と仰せになりました。」このエバの3節の返答は、正しいですか？正しくないですよ。何がただしくない？「それに触れてもいけない」とは言ってないですよ。

昔、お母さんから、「これしっちゃあだめだよ」って、言われたよね。「食べちゃあだめよ。」ってね。お母さんに厳しく言われたら、子供たちは、「分かった」と言って、とくに真面目な娘達は、「じゃあ、食べない」妹達に「私達、これ食べないでおこうね。ママが言ったもんね。」「触ることもしないでおきましょう。」って。(笑)女の子たちは、そういうのよ。付け加えて、そう言うわけですよ。「なるほど、なー」って、思うんです。そうですよ、ね。だから、余計に厳しいハードルを付けける。神様はそこまで言ってないのに。「酒に酔うな」って言っているのに、「飲んじゃあだめだ」と言う。「飲むな」と言ってないでしょ。」(笑)「飲んじゃあだめなの、お酒は」それを付け加えるのが、人間だよ。で、それを余計、面倒にする。そんなことが、結構あるんです。

はい、それから、「あなたがたが死ぬといけないから」と、神様は言いましたか？「神様は、必ず死ぬ」と、言われたんですよね。ここで「女は、初めに、アダムから聞いていたのか？」と、疑問

ですが、・・・多分、そうでしょうよ。「これこそ、肉からの肉、骨からの骨」と言われ相手」の女に、アダムが、初めに話していたはず。良くコミュニケーションを取っていたと思う。・・・けれど、アダムが、全部言ってなかったという可能性もあるし、エバがいい加減にしか聞いてなかったという可能性もありますよね。いずれにせよ、エバは、初めに言われたとおりに言えていないということの中に、アダムとエバとの本当の「向き合いが」問われてしまう。・・・という点があるでしょう。

4節すると蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。」5節「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。ハイ、皆さん、この5節には、聖書の原文で書かれているのとは、ちょっと違うところがあるんです。ここ、重要な順番があるんです。この3節は、初めに蛇が言ったのは、こうですよ。「なぜなら、確かに神は、知っているのだよ。」これが先に来るんです。最初に蛇はエバに「神は、知っているんだよ。」と、言っている。「何？コレ」「神は知っているんだよ。食べると目が開かれて、あんたたちが、神のようになって、善悪を知る者になることを」と言ったんです。

蛇は、アダムに何のカマかけているんですか？一番最初に出てくる言葉は、(朗読)「キー ヨデア エロヒーム 神様は知っているんだよ。」って、言っているわけです。ということは、神様の言ったことをどうのこうのと言うよりも、あんたたちが、パートナーとして向き合っている神は、実は、知っているんだよ。あんたたちがこれを食べると、あの神のようになれることを」と、・・・つまり、どこにウエイトがあるんですか。神様と向き合っている、相互内在に造られたエバに対して、蛇は、その神はね、実はね、神自身のことをネタにしている。つまり、エバにとっては、「自分と神様」、「私とあなた」と言うものの関係にサタンは、一つ、疑念の水を差している。「え？神様って、そうなの？」と、なるじゃあないですか。たちまちエバと神様との間に、「私とあなた」と言うよりも、神様が、ピューっと、遠くなって、あ、「そうなんだ。」と言う、思いが浮かぶ。それに対して、蛇は「神はそれを知っているんだよ」と言うことで、「善悪を知る者となるんだよね。」「神のようになれるんだよ。」というところ、追加して、関係性を崩そうとしている。

そして6節「そこで女が見ると、食べるのにその木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。」ここまでは良いですよ。初めにエデンの描写の中に「それは食べるのに良く目に慕わしいものだった。」——「美味しそうだった」——と、書いてあるんだから。そのようにエバは木を見たんだから、良いんですよ。しかし、そこに、また、「園の木は賢くしてくれそうで、好ましかった。」と、付け加えている。「賢くなる」と言う、キーワード。それは、「神のようになりたい」というキーワードです。「神のようになりたいというのは、そもそも、誰の願いなんですか？」「蛇の願い」です。サタンが神の座を狙ってたんです。でも、神には歯向かえなかったから、神から全権を与えられたアダムとエバを自分の手下にしてしまえば、それを奪えるわけでしょ。そう考えた。蛇にとったら、サタンにとったら、そうなんです。

そこで面白いことに、3章の6節には、・・・えーっと、これ、訳しにくいんですけど、「その木は賢くしてくれそうで、好ましかった。」と、こう訳されているんですけど、ことばを足せば、「その木は・・・賢く、な・れ・る」という、自分の欲求から出たような言葉が、付け足されている。自分の欲求と言うか、衝動ね、根本的な衝動から、そういうふうに、賢くなれそうだ、というものを刺激したような言い方になっている。

そしてその続き、「女はその実を取って食べ、共にいた夫にも与えたので、夫も食べた。」・・・ア

東京キングダムセミナー③20221210

ダムは、どこにいたんですか？このヘブライ語の本には、「共にいた」、本当にいつも一緒にいたという、ニュアンスです。近くにいた訳よ。だけど、アダムはどうしていたんですか？この時のアダムとエバの関係性はどうなんですか。我が骨からの骨、肉からの肉なんだけれど、そのように動いていますか？もっと言えば、エバは、ハッキリと神様がアダムに言われたことを繰り返してはいない。「死ぬといけないから・・・」と、あいまいな言葉で、終えてしまう。ハッキリ、「こうなんだよ」と、言うものがないんだったら、エバは、「ちょっと、アダム来て頂戴、なんて言われたんだっけ？」と、聞けるわけでしょ。アダムも、蛇が女にそう言っているのを聞いて、近くにいたんだら、「おいおい、エバよ、待て、待てよ。違う、違う」って、「触っては、いけないなんて、そんな悠長なことを言っていないよ。「必ず死ぬ」って、言われたんだよ。」って、なんで言わないの？

このアダムとエバの「私とあなた」と言う「エゼル ケネドウ」の関係が、物凄く試されている場面であって、しゃべるのは女ばかりで、男は、肝心な時に黙り込む。ね、(笑)

「しょうもない時に酒飲んでしゃべるくせに、肝心な言ってほしい時に言わないんだから・・・」ね、これを「アダムの沈黙」と言って、昔から、問題点なんです。「アダムの沈黙」、ここには今、男性は私だけですけど、本当ですよ、私、男の人たちに、「アダムの沈黙」って「知ってる？」って、聞くんです。大切な時に大切な一言を、言えるか、それだけ、「神の国に住んでるか、」ということなんです。単に、女が罪を犯しました。エバが下手なことをしたから、この人類は、サタンの支配に入ってしまった。と、言うことでは簡単に片付けられない内幕があるんです。聖書の原典を読めば、・・・。

骨からの骨、肉からの肉と思った女の人に、「はい、これ美味しいわよ」と言われたら、男性は、たいがい食べるでしょ。私もそう思う。妻が家において、「これ買ってきたのよ、美味しいわよ。」って、差し出されたら、「あ、そう？」って言って、パクって食べる。そんな連続でしょ。もの凄いリアリティがある。ですよ。我々のすべてのかかわりの中で、本当に「根源語」の深さが試されている。普通の生活の中で、そのことを見ようとしてみれば、いっぱいある。でも、そこまで、あなたに畳み込んで近づいて行くと、「うるさいなあ。もう」と言いたいですよね。「もうそこまで、言わなくても。」っと、言うでしょ。「でも、言わなくっちゃ」と言う場合もあるんです。だから、そこまで「私とそれ」じゃなくて、「私とあなた」と言う、我々の関係の中に、「主がおられるか」「臨在があるか」ということが、今日、試されている。そして、我々がその関係が続けながら、東の方に、我々が歩みを進んで行けるだろうかと、問われている。

そして、次、7節に、ふたりの目が開かれ、初めて、自分たちが裸である事を知ったんだけど、彼らは、いちじくの葉をつづり合せて、自分たちの腰の覆いを作ったんですよ。ここ、神様はそんなこと、言っていないんだけど、自分たちでそれに気が付いて、そのようにしたんだよね。こういう生き方の中に、入っていかざるを得ないようになってしまった。で、8節「そよ風の吹くところ、彼らは、園を歩き回られる神である主の音を聞いた。」と書いてある。これ、2017年版の新改訳聖書なんですけど、皆さんが覚えているのは、「音」ですか？ヘブライ語の原文は、「声」なんです。それを意識して「音」を聞いたとしちゃっているんです。原文は、「声」なんです。神が歩き回られる声を聞いた後に、アダムが神様に言っているんですが、3章の17節「人に言われた。あなたが妻の声に聞き従い」となっている。これ、対になっているんですよ。「神様の声」と妻の声」、神様の声を聞いて、彼らは隠れたので、神様はアダムに、『あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないと、私が命じておいた木から、食べたので、大地はあなたのゆえに、呪われる』と言われてい

東京キングダムセミナー③20221210

ると。妻の声に聞き従っちゃあ、いかなのですか。必要でしょ。

あの時この時、色々さ。ひどい男だったら、「こう書いてあるから俺は、妻のことは、絶対聞かん」と言い出すかもしれない。でもね、アダムにとっては、この3章の時に、神のことばとして聞いたことばが、第一でしょ。神との「私とあなた」の関係が第一でしょ。神の声を聞いて、そして、妻との関係を展開すべきだったんでしょ。

ところが、アダムはそっちを取らないで、単に、妻の声だけを聞いた。妻は、蛇に騙されて言っている。こういうことが、ハッキリしてくるんですよ。

だから、私が初めの時から言いましたように、「我々」と言われる神様の関係になるように、同じように、「あなたたちがエゼル ケネクドウの関係になって、向き合って、そして、神の計画と一緒に先を歩いてやり遂げることだ」と、言っている。この敏感な「根源語」の関係性に、生き生きしていた時代があったんだけど、段々と、スポイルされていく、盗まれていくわけです。 分かります？

そしてその後々、もうヘブライ語の聖書を配って説明しないけれど、この二人の子供、カインとアベルの時代以降、悲惨な歴史になるわけでしょ。あのカインの末裔から始まっているんだけど・・・ノアの箱舟に至っては、「私は、彼らを造ったことを悔いる」とまで言われているんです。「えー、」と、思いますけど、なぜなら、『彼らの内で思い図ることが、全て、悪であるから』、滅ぼそうと・・・って。一般的に聖書をつらーと呼んできた人が、そのノアの箱舟迄来たら、「えー、神様、ひどくないですか。いいじゃない、そこまで大切に導いて来たというのに、それを、ノアの家族だけで、あとは皆殺しですよ。動物たちも。」って。そこに、現代人の感覚からすれば、つまずくんです。耐えられないんです。本当に怒りと裁きの神のイメージ。「えー、」って、「まあ、しゃあないわね、神様は、絶対のお方ですから」と、そう言われたらそうだよ、受け入れるしかない。でも彼らが、心の衝動の部分から、もう、悪でしかないという、・・・いいですか、その現実と言うのは、どうなんですか。これからして、「私とそれ」の世界、これを思い図る欠けらもない。心の思い図る衝動のレベルから、完全にないと、・・・そこにね、現代人が考えるどころじゃない、神様のもの凄いな失望があるわけです。失意があるわけです。でも、神様は、そういう事柄の中を通して、ノアの末裔を通して、また、一つ前を歩く人たちを、選んで託そうとするわけです。いつもそう。それを完全に成し遂げる「人の子」を送るためにですよ。その人の子が現れた時に、その人の子を受け止められるように、また初めっから、1軍に選んだ民を育て始める。その末裔によって、回復されるように。

だけど、よく聞いて、それらが全部、昔話じゃあなくて、今日、ここに、アダムとエバがいるよ。ここにアブラハムがいるよ。我々が歩みだす、神様の東の方へと招かれている。そういうメッセージを与え続けていて下さっているわけです。

はい、さっき、質問、言おうとして、飲み込みこまれましたよね、何でしょう。

参加者：あ、いやー、1章で「神が男と女を造られた」と、最初に言っているのに、そして次に2章でアダムのあばら骨から造った」と書いてある。そこが、よく理解できなかったんです。

先生：あのね、それを続きの話のように見ると矛盾します。でも、1章に書いてある描き方は、神様が人を何のために造ったか。という、そこを重点的に言っているわけよ。2章とは違うんですよ。

1章では、あくまでも主人公は「神」です。でも2章から、なんて言っているかと言うと、2章の7節から、第7日目を過ぎて、「神である主」と言う言葉がでてきます。

2章は、1章で書かれている内容から角度を変えて、書かれているんです。つまり、神様との関係性を重点に置いて、「エゼル ケネドゥ」を重点に置いて、それをズームして、角度を変えて、詳しく書いてあるところなんです。

参加者：それなら、良く分かりました。

先生：そうなんです。連続してみてしまうと、こここのところ、「何？これ」って、ことになってしまいますけど、そうじゃあないんですよ、皆さん。

「神」「יהוהエロヒーム」というのと、「神である主」という書き方とは、違うんです。この「主」と言うのは、「私の主」と言う厳密な意味を指します。ですから、1章の「神は、」というよりも2章の「神である主」というのは、私の主なる神との関係性が、「エゼル ケネド (向き合う相手)」の関係性であることを強調しているんです。

ヘブライ語で、これ「יהוה」を「アドナイ」と読むわけです。が、この「יהוה」「ユッド、ヘー、ヴァヴ、ヘー」と言う言葉は、神様の名として、書かれているんです。けれど、この名を元々は、どう読むかを知っていたんだけど、旧約時代、聖なる名を読んではならないと言って、読まないでいたら、そうすると、この読み方を本当に忘れちゃったんです。どう呼んでいいか発音が分からなくなったんです。「神様の固有名詞を？」・・・そうなんです。「えー、」と思うでしょ。で、この名を忘れちゃったから、「主、アドナイ」と、読んでいたんです。「私の主人」が「アドン」なんです。

だからね、みんな、聖書で「主」と言っているけれど、「アドナイ」って、ただの「主」ではないんです。詩編でも、「主は、どうのこうの」と、「主は、主は、」と言っているでしょ。あれ、「私の主は」と言うことですから。客観的に、「どっかの主がいるでしょ。」というのではなくて、そういう自分の「私の・主」のことなんです。どこか遠くに離れている神様に、「主はね、」と言う感覚じゃあなくて、「私の主はね」と言う身近な存在、そういう言い方なんです。いつもそうなんです。私が、ここで、言いたいのは、「アドナイ」と言うのは、「私の・主」ということです。くれぐれも忘れないで。覚えておいて下さい。

ハイ、今日の主題、「根源語」、「私とあなた」というところを、打ち破ります。我々の習性になっている、人間関係と言うものを、一つ、深めていきます。ぐっと、深めていきましょう。でもそれは、「いっぺんにすべての関係性の中に、」と言うのは、無理です。でも、このことを知っている者同士がやりやすいんです。ね、そこに進んで、行ったらどうでしょうか。

はい、他にも質問、コメントを、どうぞ。

参加者：二つあるんですけど、今の続きっぽいことなんですけど、3章の23で、「そこで神である主は、人をエデンの園から追い出されたので、人は、自分がそこから取り出された土を耕すようになった。(24節) こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。」とありますよね、だから、先生が、東の方に前進していくように祝福して、アダムとエバを造られたけれど、でもここで、罪を犯してしまったから、「いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。」なら、行けないじゃあないですか。ここで、そうなったから。ノアの箱舟のような、神が、人を造ったことを悔いられるような人間性になってしまって、・・・。そこまでは、東に向いて前進する

東京キングダムセミナー③20221210

ように、計画されたんですよ。そのお方が、自ら、いのちの木への道に至るエデンの園の東に、ケルビムをわざわざおいて、前進しないようにされたのは、ここが良く分からない・・・そう言うわけでも、ないんですよ？！

先生：回る炎の剣とケルビムは、いのちの木へ近づくのを防ぐために、置かれていたんですよ。善悪を知る木を食べた状態で、今度は尚且つ、いのちの木を食べないように、そのいのちの木を食べるためには、女の末柄の贖いが必要だった。それを得た時に、いのちの木の実に取り掛かることができる。それまでは、もう、いのちの木の実に近づけないようにされたんです。

参加者：・・・そうなんですよ。回復されないといけない。・・・ああ分かりました。

先生：そうなんです。

参加者：すいません、そのところで、続いて質問なんですけど、エデンの園の東に、なぜ、置いたんですか。前進するところに・・・。

先生：前進するところと言うか、・・・前は確かに東なんだけど、これを置いたのは、エデンの園にもう入れないようにするために置いたんです。東は、入口だからです。

参加者：分かりました。もう一つ聞いてもいいですか。いつも疑問に思うことは、なんで、園に、いのちの木と善悪に知識の木を置いたんでしょうか、置かなければ、こんなふうにならなくて、良かったと思うんですけど、(笑) 神様の心って、どういう思いなんでしょう。

先生：ね、どう思いますか？

参加者：自由意志で、選択させるためなのか、壮大なる計画を神様が、造るための序章として、おいたのか？・・・

先生：うんだからね、それに対しては、もう、深く広く古代からいっぱいあって、・・・神様は、人間が、アダムとエバが失敗する可能性がある事を知っていて、やらせたとか・・・。

そして、このしくじりから、また、学ばせてそれに対する補助、救いの道を全部考えながら歩まれたと。だから、その意味で、「ここで、人間に「原罪」が出来たんだと、これによって、人間は、何をやっても罪なんだ」という、その「原罪」と言う言葉がね、本当にふさわしいのかどうかという、議論さえもあった。このところ、深いです。そして、もう一つは、以前、言いましたように、「いのちの木として、全ての実を食べるのか、善悪を知る木の実として、全てのもの食べるのか」ということを、「その内側に保っていたらどうか」と言うことが、重要。なぜならば、そのキーワードは、「ベトふ ハガン」「園の中央」と言う言葉です。

なんで、中央なの？「中央」と聞いただけで、ガーンとくるのは、これを聞いた人は、モーセの五書のことを知っている聞き手なんです。その聞き手が、荒野を旅している時、そのイスラエル民の中央には、そこには、幕屋があることを、聖所、至聖所があることを、知っているんです。そのところに、いのちの木の実と善悪を知る木の実を置いている。

どういうこと？端っこに置いときゃ、いいじゃない。食べたらいけないんなら、ね。(笑) そうじゃなくて、「すべての木の実を食べていい」って、初めは、言ってるんだよね。いったん、神様は、そう言ったんだよ。だけど、後で、「真ん中にある善悪の知識を知る木だけは、食べるな」と言ったんです。

参加者：と、いうことは、神様は「全部の木の実を食べて言い」と言ったんですが、いのちの木の実と言うのは、1本だけだったんですね。で、その隣に、善悪の知識を知る木が、1本だけ中央にあった、こういうことですか？

先生：善悪の木の実として、全ての木の実を食べようと思ったら、食べれるんです。

要するに、神を除外して、神の知識と権威を自分のものにしてやろうという思いで、我々が毎日食べても食べられるし、生きようと思えば、その道をチョイスして、生きられる。でも、いのちの木の実として食べるなら、「神のいのち」、そしたら、その位置じゃあなくて、神との根源性の中に、歩いて生きられるのだと、言うことです。

参加者：神様は自分を選んでほしくて、置いたって、言うことですね。

先生：でしようね。だから、昔話として読むというのも、善悪の知識を知る木の实として、食べるようなものなんです。これって。聖書のみことばを、いのちの木の实として食べるということは、今日、私達が、いのちを、・・・神との、いのちの向き合いを、向き合いとして、今日の経験今日の出会いを、食べていくことができれば、私たちは、こっちに選り取る事ができるんです。その選りは、今日と言う、今と言う、この永遠の今と言うことになるわけです。だあれもそこから、逃れることができない。ね、だから、(朗誦)「ベレシート バラー エロヒム」

我々に語りかけられている神のことばに、我々は今、どう、反応するのかと言うことです。その敏感な心が、試されている、問われている。・・・関係性なんです。だから、相互内在とか、集合人格とか、そんな言葉で、いっぱい書いてあるけど、そのセンシティブなところをね、失ったら、そのことばさえも、もう、一つの律法の欠けらですよ。単なる、教えの言葉の欠けらですよ。アーメン。

参加者：先生、時間迫っている中、この油注ぎの中で、もう一つ、質問なんですけど、3章22節、「神である主は、仰せられた。「見よ、人は、われわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。いま、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」と、書いてありますよね。だから、アダムとエバは、取ってはならないという善悪を知る知識の木の实を取って食べたから、人は、我々のように、「エロヒム」のように、なってしまう、恐れがあるからといわれた、ここ、それを取ってはならない、・・・我々と同じようになった、・・・どういうことですか？これ。

先生：だから、神を除外して、生きようという、蛇の誘惑に、負けたわけでしょ。「自分が、神の決定を自分ができる」と、いう身分に・・・、そのことを「われわれのひとりになった。」と、言うわけで、その状態で、いのちの木の实を食べたら、永遠に生きる、そうすると、彼らの人間の親分たる、サタンに永遠のいのちを与えることになる。だから、食べられないようにしないとイケない。イエス・キリストの贖いが達成するまでは。かれらが、それによって救われるまでは・・・。サタンを助けることになるから。神様が創造の時から、「分けて、分けて、分けて」と言う言葉があるでしょ。「光と闇」とを分けるって。神様は、最初から、サタンのことは、ハッキリ言っていないけれど、でも、それが、意識にあるわけなんです。

なんで、最初から、サタンはこうでねっと、言わなかったのか。分かっているんだったらと、思いますよね。神様は、このわたしとあなたの「二人の世界」を築き上げたかったんです。まず、第3者のサタンがどうのこうのと言わないで、「私とお前との二人の世界」なんだよと。そこですよ。ハイ、それで、二人の世界で、・・・と言うことだったんだけど、下手したから、イエス・キリストの贖いによって、回復した時に、初めて、「私の名によって、悪霊を追い出さない。」と言ったんですよ。あの・・・ヨブ記を読んでみて下さい。ああ、これを言い出したらもう、長くなるから、またね。ヨブ記でも、神様が、最後に叱って、言っているんじゃないですか。「しっかりしろ」と、「お前は、・・・」とそれとなく、神様は、旧約時代から、そういうことを、出していますよ。イエス様がやりはじめて、驚かないように・・・。

参加者：一言、いいですか、アダムとエバが、サタンに騙される前の状態は、罪のない状態であるということとは分かりますが、やはりそこには、不安定な要素が、まだ、あったということですよ。

東京キングダムセミナー③20221210

完全ではなかったということ、理解してよいでしょうか。常に神様に頼りながら、完成を目指す状態だったのにそこにサタンがドカン入って来て、・・・。

先生：それは、我々に対しても、物凄い鏡なんですよ。確かに、そこに、成長すべき過程がある。そうですね。イエス様を信じて、救われました。聖霊を受けました、みことばを持っています。ね、さあ、そしたら、みんなそれでね、完璧な大人か、と言われたら、とんでもない、そこから、もう、いろんな試練に会い、失敗をし、つまづきながら我々は、一つ一つ、学んで、成長していくわけじゃないですか。主は、それを待っていて下さる。そうしながら、我々は、「私とあなたの」関係の中で、互いに王権を使いながら、助け合い、いたわり合い、一つ成長していくのだと。言うことを、励まされているわけです。でしょ。そのために教会があるんですよ。キリストの体が出来ている。そこには、幼子もいれば、幼稚園もいれば、小学生、中学生、高校生、青年、大人がいる訳ですよ。みんな、で、そこに、秩序がありますよと、パウロは勧めているわけです。幼いものは、守りなさいと。色々ね。

では、時間ですので、続きは、食事をしながらしましょう。